

『古事記』の語る 歴史の仕掛けを解き明かす！

～皇統をつなぐ言葉の力の発見～

山上 直

北海道大学 大学院 文学院
日本古典文化論研究室



MicrosoftのAIツール Copilot で生成した、「高志国(こしのくに)のヌナカワヒメ」です。よろしくお願いします。



未来社会のあるべきかたち

◆「言葉の力」で「多様性」を活かし、持続可能な社会へ

『古事記』は、異なる文化や歴史を「一つの共同体の力」として活かすための、「柔軟な思考」のヒントを現代に与えてくれます。文化や歴史を尊重し合う「共生社会」の構築に貢献します。



『古事記』・古代史の基礎知識

*そもそも『古事記』とは？

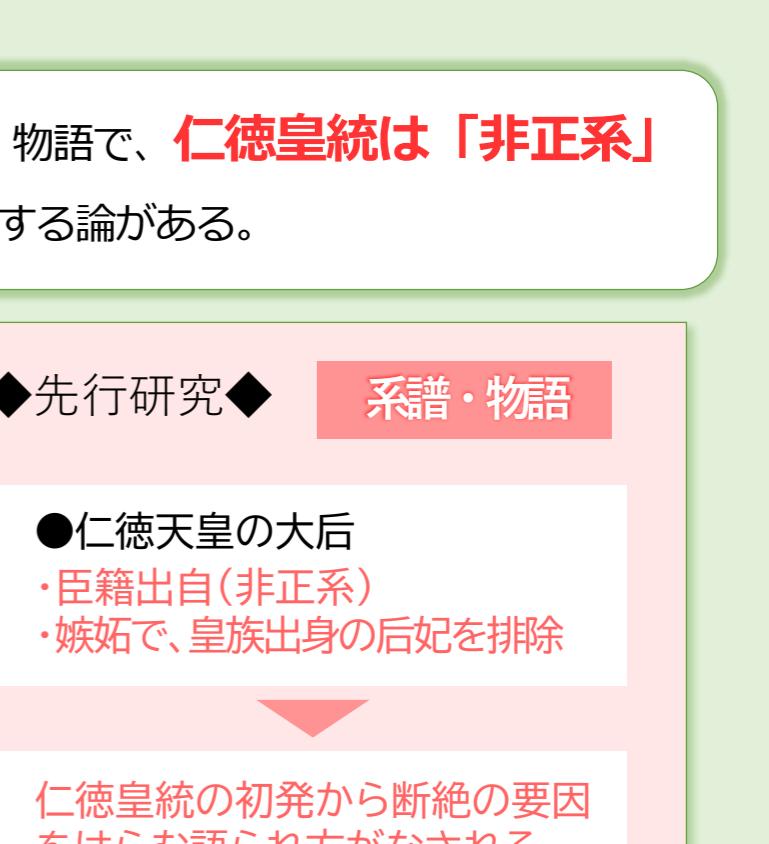
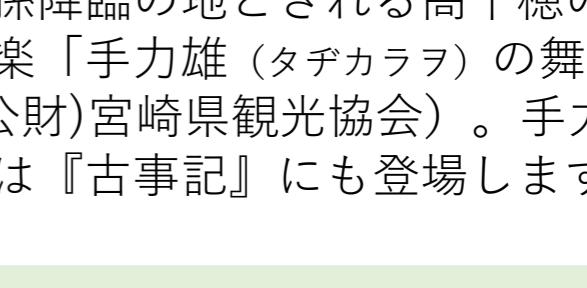
- 天武天皇の命に発し、712年に成立した、現存する日本最古の歴史書。
- 本研究では、『古事記』を古典文学作品の一つとして扱い、研究します。



作品的構造を持ち、一つの論理に貫かれている（作品論的アプローチ）



上巻には、八岐大蛇や天岩戸など、日本神話がたくさん載っています。
「高志国(こしのくに)のヌナカワヒメ」の話もありますよ。

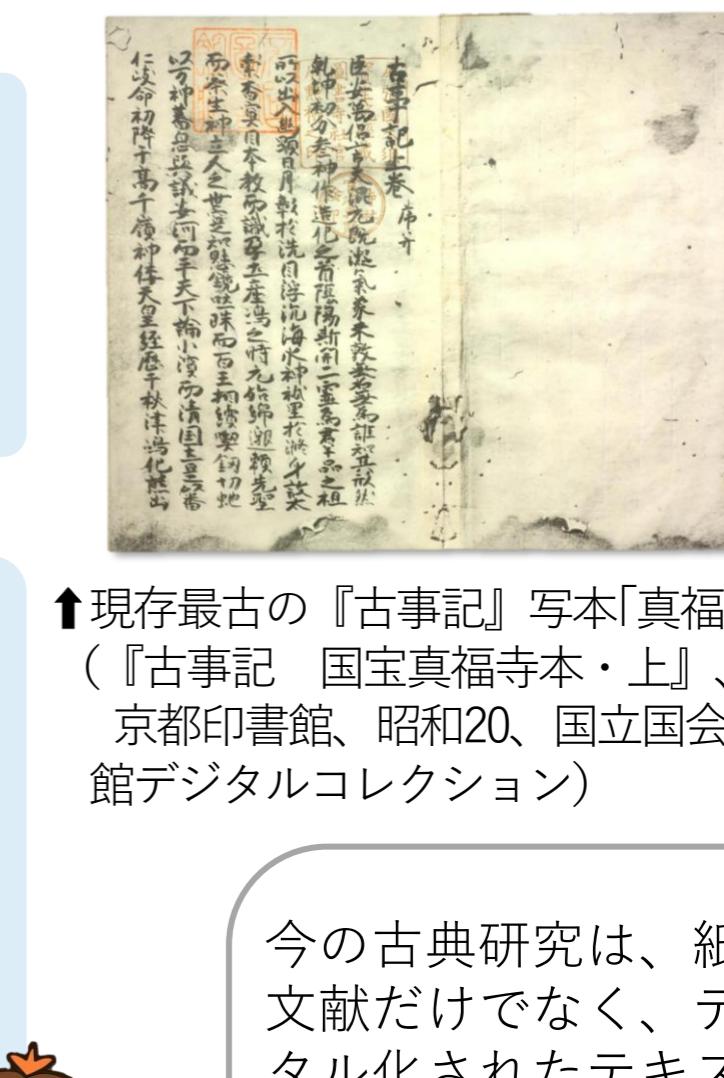
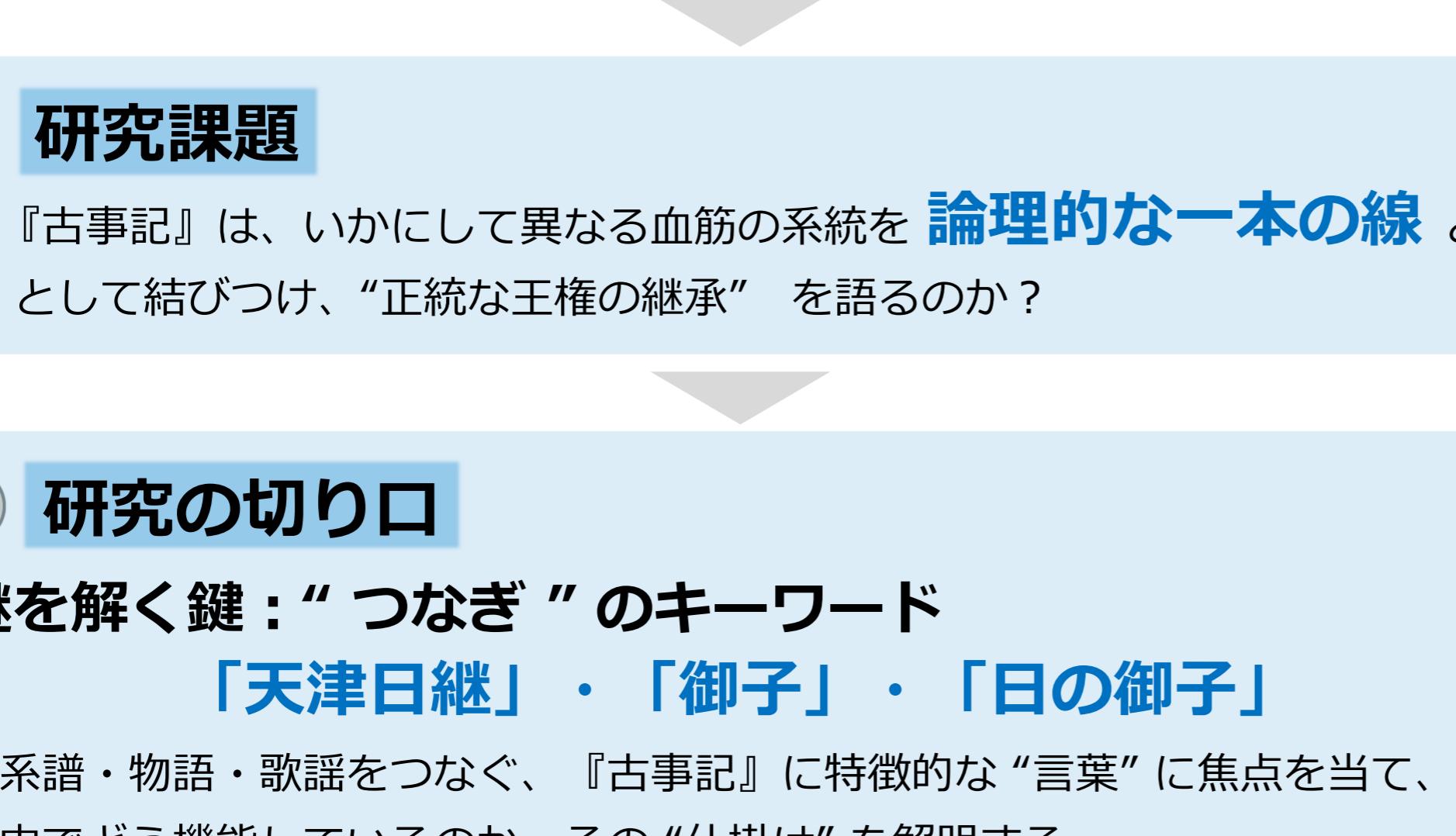


↑天孫降臨の地とされる高千穂の神楽「手力雄(タヂカラヲ)の舞」(公財)宮崎県観光協会)。手力雄は『古事記』にも登場します。

『古事記』の謎……断絶する仁徳皇統の語り方

修士論文では、歌謡で、仁徳天皇・雄略天皇は「日の御子」と讀えられ、仁徳皇統の王権の正統性が確認されていた。

先行研究には、系譜・物語で、仁徳皇統は「非正系」に位置付けられているとする論がある。

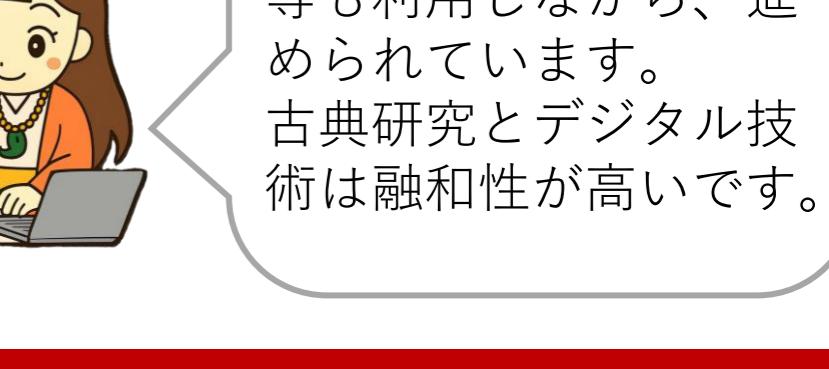


*矢嶋泉氏「古事記の歴史意識」(吉川弘文館、2008年)



研究課題

- 『古事記』は、いかにして異なる血筋の系統を「論理的な一本の線」として結びつけ、「正統な王権の継承」を語るのか？



↑現存最古の『古事記』写本「真福寺本」(『古事記』国宝真福寺本・上)、京都印書館、昭和20、国立国会図書館デジタルコレクション)



研究の切り口

謎を解く鍵：“つなぎ”のキーワード

「天津日継」・「御子」・「日の御子」

- 系譜・物語・歌謡をつなぐ、『古事記』に特徴的な“言葉”に焦点を当て、作品中でどう機能しているのか、その“仕掛け”を解明する。

研究のこだわり

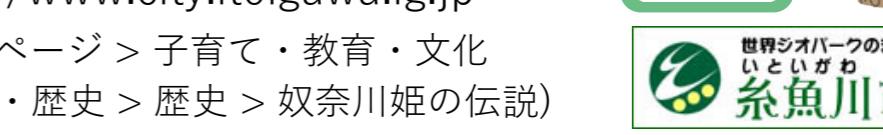
- 自分に都合の良い解釈を排し、作品に「謙虚・誠実」に向き合う。



今の古典研究は、紙の文献だけでなく、デジタル化されたテキスト等も利用しながら、進められています。古典研究とデジタル技術は融和性が高いです。

《社会への貢献》

- 古典文学を通じて、文化的な知恵を継承する。



- 地域アイデンティティの構築に貢献する。

- 謙虚・誠実な姿勢で文学を解釈し、多様性を調和させる社会の土台を築く。

- 一つのテキストから多角的な視点を引き出す力は、対話社会の鍵となる。

- 物語を繋ぐ構造を解明することは、共同体間の連携のヒントになる。



興味を持った方は、このページも見てみよう！

現存最古の写本 真福寺本『古事記』

国立国会図書館デジタルコレクション

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1184132>



「ヌナカワヒメ」の伝説

新潟県糸魚川市公式ウェブサイト

<https://www.city.itoigawa.lg.jp>

(トップページ > 子育て・教育・文化)

> 文化・歴史 > 歴史 > 奴奈川姫の伝説)

